

# 大英帝国の光と闇

## ——Pygmalionにおける階級と性差——

01E078 田村剛一

はじめに

現在の日本にはかつて程の階級差や男女差というものは存在しなくなったように見える。しかし依然としてそれらは存在している。こうした差別は19世紀～20世紀初頭のイギリスにはもっとも顕著な例が見受けられるのではないだろうか。ヴィクトリア朝の帝国主義の下に繁栄していたイギリス、しかしその上流階級の煌びやかなサロンに代表される優雅な文化の裏には、下層階級の過酷な生活が確かに存在していた。技術革新によって人々の暮らしは激変し、思想に変化がもたらされた。故に当時のイギリスは近代社会への転換期であり、当時の考え方は今のわれわれの生活にも影響を与えていると私は考えている。このレポートではバーナード・ショー (George Bernard Shaw 1856-1950) によって世に出された、『ピグマリオン』(Pygmalion 1913)を題材に当時のイギリスの階級差と男女差について論じていこうと思う。

### 第1章 階級における光と闇

#### 1. 地域

『ピグマリオン』の第一幕で、言語学者ヘンリー・ヒギンズ (Henry Higgins) が人々の話す言葉から彼らの出身地を当てる場面がある。このことは階級、言葉、地域は密接な関係を持っていたことを示す。ヒロイン、イライザ・ドゥーリトル (Eliza Doolittle) はロンドンのドゥルリー・レーン (Drury Lane) 出身でコヴェント・ガーデン (Covent Garden) で花売りをして生活をしている下層階級の女性である。ドゥルリー・レーンとはコヴェント・ガーデン地区の古い通りで、もとはヴィア・ド・ホールドウィッチと呼ばれていた。現在の名称は後にここに屋敷を建てたサー・トマス・ドゥルリーの名前に由来する。16世紀、17世紀には上流階級の集まる通りで1646年にはオリヴァー・クロムウェル (Oliver Cromwell) も住んでいたが、イライザが生まれる19世紀末にはロンドンでも最悪のスラム街と化していた。コヴェント・ガーデンは今でこそロンドン中心部に位置しているが、もともとはウェストミンスター市にあった尼僧修道院の庭に由来している。16世紀にヘンリー八世の修道院廃止により、土地は国に没収され初代ベッドフォード伯爵ジョン・ラッセルに与えられ、現代のラッセル・ストリート (Russell Street) やベッドフォード・ストリート (Bedford Street) などはその当時の名残であると言える。1630年代に第四代伯爵が有名な建築家だったイニゴ・ジョーンズに依頼してこの辺りに都市設計を行い1670年代に五代目伯爵が広場で野菜・果物・生花を取引する許可を国王から得て、ここはロンドンを代表する青物市場となった<sup>(1)</sup>。映画『ピグマリオン』では多くの人々に賑わう市場が描写されている。1663年にはドゥルリー・レーン、そして1732年にコヴェント・

ガーデンの二大劇場が建てられ、また18世紀以降は歓楽街として栄え、「売春宿」が続々と増え、ロンドンの赤線地帯として有名になった。このような背景を考慮し、イライザの台詞をみてもみる。

I'm a respectable girl... I never spoke to him except to ask him to buy a flower off me.

(ACT I, p.4)

彼女はあくまで花を売っているだけで、けっしていかがわしい商売などしてはいないと言い張る。1860年代初頭のロンドンには約3000の売春宿があり推定8万人のプロの売春婦がいて、その他にも数千の素人売春婦がいたと言う。かつては通行の邪魔にさえならなければどこでも呼び込みをして良いとされていたが、後に性行為による性感染症を防ぐために売春婦に検査が義務づけられた。その後の女性の人権擁護への関心の高まりからこれらは緩和されたが、依然としてこのような女性たちに対して取締りが厳しく、イライザが過敏に反応したこともうなずける。

それではヒギンズ教授はどうだろう。彼が住んでいるウィンポール・ストリートは高級住宅街で、オックスフォード・ストリートの北側を南北に走る1724年頃に敷かれた道路で、西側の家並みには歴史的な雰囲気も現在でも残っている。彼は音声学の分野においてかなりの実力をもち、パブリックスクールからオックスブリッジへと英才教育を受けたことが想像できる。

ピッカリング (Pickering) 大佐は、作中で彼の学歴がはっきりと示されている。チェルトナム (Cheltenham)、ハロウ (Harrow) のパブリックスクールへ通い、ケンブリッジ (Cambridge) で大学教育を受け、インドで仕事をしていたとヒギンズは言い当てる。そして帰国後はカールトン・ホテルに宿泊中であるらしい。チェルトナムは1841年、ハロウは1571年に創立され、いずれも最高クラスの教育機関として現在に至っている。ケンブリッジはイギリスでも名門中の名門校であり長い歴史を持っている。イギリスは1600年以来インドにおける貿易活動を独占してきた。東インド会社の貿易特権は1813年、33年に制定された法律により剥奪されたが、会社は統治のための完全な行政機関に転化され、1870年以降はイギリスが帝国主義を進めるに伴い、周囲の植民地侵攻の拠点となっていた。ピッカリング大佐はそこで英語と同じインド・ヨーロッパ語族のサンスクリット語を研究しており、ヒギンズ教授も一目置くほどの本を執筆したらしい。彼が宿泊しているカールトン・ホテル (Carlton Hotel) はペル・メル・イーストで1899年から1939年まで営業していた高級ホテルで、豪華ホテルの代名詞のように言われる「リッツ」を築き上げたスイス人セザール・リッツによってつくられた。

イライザの父親、アルフレッド・ドゥーリトル (Alfred Doolittle) は、父親の出身地がハウズロウ (Hounslow)、そして母親の出身地がウェールズ (Welsh) とされている。ハウズロウはロンドン西郊、テムズ川西に位置する地域で、この辺は鉄道の登場とともに人口が膨張し、1840年にはこの地にグレート・ウェスタン鉄道が開通した。ウェールズはかつて国土の90%を占める内陸高地で牧羊が行われていたが18世紀後半から19世紀初めにイングランドの多くの企業家が南ウェールズ炭田地帯の北辺をイギリスの重要な製鉄地帯とした<sup>(2)</sup>。

エインズフォード一家 (The Eynsforths) に関する地名としては、エインズフォード夫人はエプサム (Epsom) で育ち、娘のクララ (Clara) はアールズ・コート (Earl's Court) で育ったとされる。エプサムは20世紀に入ってから近代化が進み高級住宅街となった。アールズ・コートの名前はかつてこの地の領主であったウォリック伯爵とホランド伯爵の邸宅があったことに由来してい

る<sup>(3)</sup>。19世紀後半に入って現在の地下鉄アールズ・コートが完成し、住宅の建設を始めとする土地開発が進んだ地域である<sup>(4)</sup>。その他、その場にいた野次馬たちの出身地としてセルシィ(Selsey)、リスン・グローブ(Lisson Grove)、ホクストン(Hoxton)が言及されるが、いずれも貧民街で治安の悪い地域である<sup>(5)</sup>。

最後にイギリスの都市形成について述べる。ロンドンを中心部分に仕事場所があり、そのすぐ周りに下層の人々、そのまた周りに上層の人々の住宅街、と言うように形成されていった。交通が発展するに従って上層の人々はより環境の良い郊外に移り住むようになり、中心部にはより良い稼ぎを求めて田舎から出てきた人々が集まった。産業革命以後、工業化と人口過密に伴い都市の衛生は凄まじいスピードで悪化していった。1871年には天然痘により二万三千人の人が死んだと報告されている<sup>(6)</sup>。

## 2. 階級の「典型的」特徴

人物の描写には、彼らが属する社会階級を定義づける特徴がしばしば表される。個人レベルとしての特徴としてではなく、その個人が属するクラス全体としての表象である。それではまず上流階級から見ていくとしよう。上流階級は家柄と遺産への執着心が強く、特に男性は気まぐれと排他性、横柄とも取れる絶対的な自信、慈善事業への強い関心、狩猟・屋外スポーツなどの娯楽好き、豊かな趣味と教養、しばしば愛人関係などに見られる性に対する寛容さで特徴づけられる。これは彼らの生活がいかに



図 アスコット競馬を楽しむ上流階級の人々 1844年  
(ヒューズ、1999年、197頁より引用)

余裕のあるものであったかを象徴している。また彼らは夢見がちな上流の女性だけでなく、生き生きとした魅力を持った下層の女性をも相手にしていたとされる<sup>(7)</sup>。趣味に興じられるのは金銭的、時間的余裕のある証拠で、当時のジェントルマンのステータスとして「如何に女たちに楽をさせられるか」という基準があり、愛人関係もいわゆる「男の甲斐性」、魅力、または力(財力)の象徴として表象されているのではないだろうか。中流階級は産業革命や時流に乗って上昇した新興階級によって形成され、努力と運によって最も変動のしやすいクラスであったような印象を受ける。また最下層の労働者階級は「自分を生かし、人をも生かせ」と言う受身の価値観を持っているようである。ギャンブルを好むという特徴も挙げられる。また上流階級と労働者階級には面白いことに類似性が見受けられる。強健さ、世論への関心、ギャンブルへの情熱、齒に衣を着せないこと、ありきたりの手のかかっていない食べ物を好むところなどである<sup>(8)</sup>。しかし、これらの類似が生まれた過程は正反対であると私は考えている。強健さは、上の者にしてみれば自らの地位からくる自信によるものであり、下の者は生活に余裕がなく気持ちを強く持っていかなければ生きていけなかったのであろう。世論への関心は、上流階級は晩餐会などに出る際の話作りや、自分の地位を守るためであり、労働者階級はなんとか自分たちの今の生活から脱出したいがために僅かな希望を社会に求めたのではないだろうか。また齒に衣を着せない言葉使いについてだが、上流階級の場合は絶対の自信からくるものであり、労

働者階級は生活の余裕や教育のなさを示すものであろう。

これらの特徴を『ピグマリオン』の登場人物たちに照らしあわせてみよう。社会的に立場の低いイライザやアルフレッド・ドゥーリトルには上記の一般的な特徴だけでなく、その背後にある彼らの内面が深く描かれているように私は感じている。特にアルフレッドに関しては、彼の類まれな話術や説得力は彼の属する階級を超えた位置にあるような感じを受ける。バーナード・ショーは彼に何らかの役割を持たせたいがためにこのような人物を創作したのであろう。

一般的な特徴が典型的に描かれている人物としてはピッカリング大佐、エインスフォード夫人である。まずはピッカリング大佐の行動を振り返ってみよう。彼の行動のもとになっているのは後に説明するクリスチャン・ジェントルマンの規範にもとづいたものであると言える。いかなる場合においても礼節をもって対応し、道徳を重視した行動は正に生粋のジェントルマンである。エインスフォード夫人は上流階級ではあるが既に没落しかかっている家庭の夫人である。

People will think we never go anywhere or anybody if you are so old-fashioned. (ACTⅢ, p.40)

娘のクラスのこの台詞から察するにあまり社交界には顔を出していないようである。社交界デビューを果たさなければ、上流階級として認められないはずであるが、彼女の家はそのような場に出ている余裕が財政的にないようである。故にイライザの言葉使いに関して、それがファッションナブルな話し方だと誤解したりするのである。

ヒギンズ教授はどうだろうか。彼もまた階級にとらわれない特徴を持っている。彼はどんな人物に対しても自分のスタイルを崩すことはない。ピッカリング大佐と違い、それはマナーとしてではなく彼のスタイルとして表れる。良くも悪くも彼はマナーを重んじたりはしない。ヒギンズ夫人のお茶会でエインスフォード一家に対する態度は控えめにいっても礼儀正しいとはいえない。

### 3. 教育に関すること

イギリスの社会において階級によって教育の差が見られるという点は重要である。そして『ピグマリオン』においても、それは作品を読む鍵になるテーマの一つである。イライザはヒギンズ教授のもとで教育され、上流階級のマナーを身につけ社交界デビューを果たす。イライザが出身階級を超えるためにはある種の「変身」が必要であった。当時のイギリスには階級を見分ける方法が三つあった。まずは体格、食べているものが違えば成長具合に差が表れてくる。次に服装である。イライザがヒギンズの家でまず風呂に入らされ、服を着替えさせられるのは象徴的である。そして三番目に言語である。日本にも地域ごとに方言が存在しているように、イギリスではまさに「一言しゃべればお里(階級)が知れる」という状況があった。上流階級が使う英語としては、オックスフォード・アクセント、メイフェア・アクセント、パブリックスクール・アクセント、クイーンズ・イングリッシュなどがあるが、これらは現在では「気取っている」というニュアンスも含まれるようだ。『ピグマリオン』ではヒギンズ教授がイライザの Cockney (Cockney) を矯正する。これは生粋のロンドンっ子が話す下町英語であり、慣習的な定義によれば「ボウ教会の鐘の音が聞こえる範囲内で生まれたロンドンっ子」ということである。このボウ教会というのはチープサイドにあるセント・メアリ・ボウ教会をさす。コ

ックニーという言葉は若い雌鳥が生んだ不完全な卵を指し、かつては都会の人間が田舎の人間に比べてひ弱であると言われていたことに由来する。このコックニーは地域の方言であると同時に、貧しく、一般的に教育のない、低い身分出身の現われとみなされて<sup>(9)</sup>、作品の中でも象徴的に使われている。

それでは階級における教育の差を見ていこう。上流階級において教育は一種の義務である。各界のエリートたちの社会出自や学歴について調べてみると彼らの多くはパブリックスクール出身者であり、オックスブリッジで教育を受けたとされる。ピッカリング大佐のようなインド高等文官は高い社会的地位と高収入を誇る大英帝国の高級官僚であった。1892年～1914年にかけて採用された者の学歴調査によれば中等教育ではパブリックスクールの出身者が60%、高等教育ではオックスフォード出身者が49%、ケンブリッジが30%を占めていた。また19世紀後半以降、都市の銀行家たちの階級上昇を可能としていたのがやはり学歴で、エリート職に就くためパブリックスクールからオックスブリッジを経るという教育ルートは確かに存在していた。本来パブリックスクールと言うのは比較的貧しいが優秀な男子に、主にラテン語を無償で教える学校として発足したものであり、支配者階級の師弟を教育する場として特別に創設されたものではなかった。寄付制のグラマースクールはオックスブリッジへの進学準備教育を行い、主に聖職者への道を開いていた。16世紀～17世紀半ばにかけて多くの富裕な商人や名望家による寄贈を受け、全国の主要な町に普及していった。しかし19世紀初頭は、上流階級は有閑階級として暮らして行けることがステータスとなっていたために学生たちの心は墮落し、体罰などもまた問題になっていた。そこでラグビー校校長のトマス・アーノルドは当時腐敗していたパブリックスクールの改革を行い「クリスチャン・ジェントルマン」を育てる教育を提唱した。その教育理念は「第一に宗教教育と道徳的規律、第二にジェントルマン的な行動、第三に知的能力」である。これらはキリスト教主義の道徳観のもと「生活に使命感を持ち、自分の仕事を遂行するというキリスト者の生き方」を悟らせ、「働くことの意義」に目覚めさせ、「使命感と責任感」を自覚した有意義な人生を送ることの大切さを教えた。また近代化に伴い実学的な教育が望まれる中で、彼はあえて従来どおりの古典教育に重きを置いた。現にラグビー校のカリキュラムは実に8割もの時間がラテン語、ギリシア語に当てられていた。それは彼がギリシア・ローマの古典が人間形成の上で有効であり、古典こそが人類の遺産であり教養として学ぶ必要があると考えたからである。1895年に科学の必修化、母国語の英語の登場、数学の増加などカリキュラムの多様化が見られるが、依然として古典語を中核とするパブリックスクールのカリキュラムの基本は強固に存続していた<sup>(10)</sup>。女性に優しく、礼節を重んじる「イギリスの紳士」のイメージは、彼の提唱したクリスチャン・ジェントルマンに基づくものである。『ピグマリオン』に登場したピッカリング大佐は明らかにジェントルマンの典型である。

産業革命期における貴族やジェントリの師弟教育はチューター（家庭教師）制度にもとづく家庭教育とパブリックスクールを中軸とする学校教育との二面から行われていた。17世紀には前者が主流でオックスフォード卒業の優秀な人々を雇い入れて行った。18世紀以降は段々と後者が重要視されるようになっていった。ヒギンズ教授はこの家庭教師によって生計を立てていたように思われる。それを示す彼の台詞としては以下のようなものがある。

I've taught scores of American millionairesses how to speak English. (ACT II, p.21)

家庭教師というのは大学に残って教師として働くよりも稼ぎは良かったらしい。また女性は外部の教育機関で学ぶことが出来なかったため女性の教育は主に家庭教師によるものであった<sup>(11)</sup>。

19世紀後半は産業革命により中流階級の富裕化でジェントルマン化するものが現れた。しかしこれらはジェントルマンの生活を模倣することにとどまり、これらの行為は軽蔑の意味を込めてスノバリ、またはスノビズム（紳士気取り）と通称された。真のジェントルマンとなるためには幼い頃よりの教育がものを言うため、これらの社会の変化は教育問題が大きく取り上げられるきっかけになったのである<sup>(12)</sup>。新興ジェントルマンの出現は実学的な教育の導入を求めた。また当時宗教教育を目的とした学校はイギリス国教徒でなければ入学できないなど労働者などにとっては不利な制度が多かった。そこで国家が法制的に宗教的束縛を排除した。オックスブリッジへの入学要件としては、19世紀イギリスでは国家試験型の中学校終了試験は制度化されておらずオックスブリッジ入学選考は各カレッジで独自に行われていた。平均的な学生の入学年齢は19歳程度であり、入学に当たっては面接と簡単な学力証明が必要であった。学力の面では、パブリックスクールで学んだラテン語とギリシア語の知識が求められていたため、これもまた新興ジェントルマンにとっては不利な条件の一つであったといえる。

それでは労働者階級における教育はどのようなものであったのだろうか。シャフツベリー卿は社会的弱者解放に尽力した上流階級人として挙げられる。貴族の義務、ノブレス・オブリージュ（Noblesse Oblige）と福音主義的キリスト教徒としての義務感から女性、児童、精神障害者、奴隷などの人権のための改革に彼は大きな貢献をした。多くの法律改正や制定により児童たちの負担を軽くし、教育を受ける機会を増やすことに成功した。1870年に制定されたフォスター教育法により既存の有志立学校は政府の補助金を拡充し内容の充実を図りながら存続し、有志立学校が不十分な地域では地方税によって公立小学校を設立した。そこでは小額の授業料を徴収するが貧困家庭は免除された。これは当時としては画期的なシステムであった。後の1902年に制定されたバルフォア教育法は初等、中等教育を地方教育局の権限に委ね、しかし公立小学校だけでなく有志立学校にも地方税を投入すること、グラマー・スクールにも助成金を支給することをしたが、非国教徒の反対が強かった<sup>(13)</sup>。それまでの封建社会から脱却した労働者に対する多くの新法の制定は、画期的であったと思われる。上流人たちの慈善事業に対する関心は彼らの示威行為であるかもしれないが、動機はどうであれ彼らは行動し現に彼らの尽力により多くの労働者が教育の機会を得、そして生活に光をもたらされた人もいたのだと思う。

ここで哲学者であるジェレミー・ベンサムのカレストマチアに触れておこうと思う<sup>(14)</sup>。カレストマチアとは二つのギリシア語から作られた彼の造語で「役に立つ学問」という意味を持ち、宗教教育を否定し「実学」の学習を中心とした教育課程論である。19世紀以前のイギリスにおいて教育は上流階級の「特権」であった。しかし教育は特権階級の独占物であってはならず多くの人々に開かれるものであるという考えに基づき立案されたカレストマチック・スクール（Chrestomathic）は7～14歳で修了し「男女平等」である事を旨とした。教育方法としては「助教師制」が考えられていた。生徒の習熟度に見合った教育を行い、画一的な教育法や強制的なカリキュラムを否定するものであった。宗教教育を否定した事によって教育機会の平等を得、また公金を期待しない私立運営を考えたが、細分化されたカリキュラムは多種多様でそのため教科書は必要不可欠であった。そのため必ずしもコストの面では下層市民向けとは言えなかった。現代においてこの教育方法は必ずしも実現不可能な教育方法ではなく、現代の大学における教育方法の先駆的なものであったように感じられる。『ピグマリオン』のアルフレッドは年齢

から見て改革以前に少年期を過ごした人物であり、そのため彼の弁論術は教育によって得られたものではないことがわかる。

繁栄の影には多くの犠牲がついて回る。当時のイギリスにおいては、それは下層の労働者、児童、そして女性である。だがそれら社会的弱者に対して具体的に先進的措置が取られ始めた転換期であったこともまた事実であった。上流階級の人々は自らの義務としてそれらを改革し、また市民は己の権利を勝ち取るために戦い、それらは暴挙となることもあった。19世紀におけるイギリスの変革は、ラッドライト運動、女性人権運動等のように過激な運動に発展することもあったが、おおむね、上流階級人からの歩み寄りもあり革命という壮絶な変革が起こることはなかった。先ほど紹介したトマス・アーノルド、そしてシャフツベリー卿や自由党下院議員のウィリアム・E・フォスター、1902年にバルフォア教育法を制定した時の首相バルフォアなど、彼らは自らの倫理規範に従ったのか、それとも示威行為なのか、または、まったく別の意図があったのか、明確な答えを得ることはできない。ここまでは階級による差を見てきたが、次は性差について検証していくことにしよう。

## 第2章 性差に関する光と闇

### 1. 「家庭の天使」について

女性は家庭で仕事をするものというイメージがいつ出来たのか。そして女性は男性に従うものという考え方が出来たのはいつなのか。キリスト教では最初に神が創ったアダムのあばら骨よりイヴを作り出したとされる。これは欧米において少なからず影響を与えていると思われるが、日本ではどうだろうか。イギリスと日本、二つの国は場所と時は異なるが、同じような道を歩んできたと私は考えている。ヴィクトリア朝において、女性は肉体的にも精神的にも脆弱で、男性よりも劣っているという女性観は一般的であった。後に「女性は弱い存在であるから守るべきものであり。女性の知性が取るに足らないものであったとしても乱暴な男性から保護される必要のある精神の純粋さと霊性を持っている」と言う考えがあらわれた。これは中世の女性に対する「騎士道的な」行為の名残である。女性の理想像としては明治以降日本にも表れた「良妻賢母」が理想とされた。19世紀後半にコヴェントリ・パトモアは1854年～62年にかけて書いた四部作の長編詩「家庭の天使」で結婚の幸せと清らかな妻の愛を詠い上げ、これ以降は「家庭の天使」が女性の理想像を指す言葉となった。

### 2. 『ピグマリオン』における女性たち

さて一般的な女性の理想像を見たところでピグマリオンに登場する人物たちについて見ていこう。第1章の階級のところで当時の階級人らしくないところではあえて女性たちを挙げなかった。彼女たちが階級的特徴にも、当時の一般的な女性観にも分類できない人物だからである。イライザは下層の「花売り」として登場し、最終的にヒギンズの教育のもと立派な一流のレディとなり、そしてヒギンズの下を離れていった。ショウの『ピグマリオン』ではシンデレラ・ストーリー的な「拾われた女」と「拾った男」が結ばれるエンディングを迎えてはいない。この作品で強調されたものは「女性の自由意志による自立」と私は考える。当時の中上流階級の多くの女性にとって、結婚こそが人生の成功でありゴールだった。しかし、イライザはあえてその道を選ばなかった。フレディとの結婚という形にはなったが、それはけっして相手から

選ばれたわけではなく自らの意思による選択である。上流階級は外面に固執した階級としてこの作品では描かれている。内面の伴わないマナーや服装がまかりとおる社交界、それはヒギンズ教授とピッカリング大佐の賭けが成功したことに示されている。そんな中でイライザはあくまで己の感情に従ったように感じられる。作中でも“feeling”という言葉が何度か登場する。晩餐会の後、がんばったイライザに対して一言も声をかけてやらず、ヒギンズとピッカリングが二人だけで勝利に浮かれていたことにイライザの感情が爆発するシーンがある。それはイライザという個人のもではなく、当時軽んじられていた女性の感情を代表するものであり、男性中心的社会に対する批判だと受け取れる。イライザは下層階級出身の女性ではあるが、彼女の中にはお上品ぶった仮初の倫理は存在せず、生きた感情があるのだ。ここで上流階級の中身の無さは、厳格すぎる道徳や儀式的なマナーは時として人間性を奪うということを伝えているのではないだろうか。

ピアス夫人 (Mrs. Pearce) やヒギンズ夫人に共通して言えることは、彼女たちはしたたかさとは少し違う、しっかりした強さを持っているということである。ヒギンズ教授と渡り合えるのはたいしたものだが、彼女らとイライザが違う点は自分の領分を超さないという点である。ピアス夫人はあくまで家政婦として、ヒギンズ夫人は上流階級に属する人物として描かれている。イライザは階級を超越した位置にいて、外面的にはレディーになるが、内面は変わっていない。三人に共通していることは決して女性だからといって男の言いなりになってはいないと言うことで、それぞれ「自分」というものを持っている。ショウは実際に女性人権獲得を支援する立場を取り、かなり過激な意思表示もしたらしい。そんな彼が登場人物に女性の力強さや自立性を託したとしても深読みのし過ぎではないだろう。それに対しエインスフォード夫人は古い慣習に捉われ、とにかく場に合わせようとしているような雰囲気がある。例を一つ挙げてみよう。

I daresay I am very old-fashioned; but I do hope you won't begin using that expression, Clara. I have got accustomed to hear you talking about men as rotters, and calling everything filthy and beastly; though I do think it horrible and unladylike. But this last is really too much

(ACT III, pp.40-41)

彼女のヴィクトリアン的女性観が伺える台詞である。彼女は特定の地位に位置し、それを揺るがず変化を嫌っているようだが、昔の理想にしがみつき新しい慣習を受け入れようとしない彼女こそが実は余りよい状態で生活を送っておらず、気持ちに余裕が持てない様子は皮肉に映る。

### 3. 法における女性の立場

フェミニストたちの運動によって女性の法的な不利益はずいぶん軽減されたようだが19世紀中葉頃はまだまだ女性に対する認識が甘く、今からみればよくもこんなのがあったものだと呆れさせるものがある。ここでは二つのエピソードを紹介する。

国会議員の妻でフェミニストのミリセント・フォーセットは、1870年のある日ロンドンの街角で財布をすられた。やがて犯人が挙げられたので、証言するために出廷したところ、その罪状を聞いて愕然となった。「ミリセント・フォーセットの体からヘンリー・フォーセ



ットの財産である 1 ポンド18シリング 6 ペンス入りの財布を盗んだ」という文言が雷のように耳を打ち、「まるで自分が窃盗で告発されたみたいなのがした」のである。妻がもって来た持参金も自分で稼いだ金も全て夫の所有にしてしまう法律の仕業である。

(度会好一、41頁)

既婚女性の財産権に関する法律は1882年に改正され妻は分離財産を持つことが出来るようになった。次の話は性感染症に関するものである。1864年に制定された「接触感染症法」はカラッハ、ポーツマス、コークなどの11の駐屯地や軍港に特別な私服警官をおき、その判定で女をだれでも「街娼」として逮捕でき、警官の呼び出しを拒否した場合、法廷に立って身の潔白を証明しなければならないといったものである。後に廃止運動の指導者であるジョゼフィーヌ・パトラーの尽力によりこの悪法は無事廃止の運びとなった。ヴィクトリア朝時代は性に関して厳しい時代であったが、一方では多産が悩みの種だった。避妊に対する認識も甘く迷信めいたことを行ったりしていた。ましてや下層の市民は避妊具なども買えず、多産になることは目に見えていた。また中上流階級とは違った性に関するモラルが下層階級にはあったらしい。ピグマリオンの中でピッカリング大佐とアルフレッド・ドゥーリトルとの会話の中でこんなものがある。

Pickering: But you've been through it before, man. You were married to Eliza's mother.

Doolittle: Who told you that, Colonel?

Pickering: Well, nobody told me. But I concluded—naturally—

Doolittle: No: that ain't the natural way, Colonel: it's only the middle class way. (ACTV, p.65)

つまり上流階級と労働者階級とでは規範とするところが違うということである。ピッカリング大佐にしてみれば「子供がいる」ということは「結婚している」ということであり、現在の日本も一般的にこのような価値観を共有している。一方、アルフレッドのような下層階級のものは、「倫理で飯は食えない」という価値観を持っている。劣悪な環境の中では、なり振りかまっけては生きていけない実情がそこにはあったのだろう。

## 結 論

『ピグマリオン』の読解とそれに伴う研究を通して、19世紀から20世紀初頭のイギリスと現代の日本とで何か近いものが感じられた。不況とは言え、現代日本は高度に経済成長し今や先進国の仲間入りを果たし、今では仕事を求めて他国からも仕事を求めて多くの人々が日本に来ている。だが成功者の影には必ずその競争で負けた人々がいる。ヴィクトリア朝時代でも上流階級の繁栄の陰には下層階級や女性の悲惨な実態が隠されている。私は現代の日本に何か近いものを当時のイギリスの文化表象の中に感じている。「歴史は繰り返す」と言うが今の日本の歩み方は、程度は違っても同じ道を歩んでいるのではないだろうか。性に関して敏感になった点、女性に関して不平等な社会状況の見直し、歴史を女性の目から見直す動き、またこれらに関する論争など、『ピグマリオン』が書かれた時代に共通する点が多く見られるのである。

## 註

- (1) 『ロンドン事典』199～202頁。
- (2) 『イギリス歴史地図』44頁。
- (3) 『ロンドン事典』245～246頁。
- (4) 『イギリス歴史地図』34～35頁。
- (5) 『ロンドン事典』434頁。
- (6) 同書377～378頁。
- (7) 『ヴィクトリア朝の性と結婚』を参照。
- (8) 『ヴィクトリア朝の人と思想』、『十九世紀イギリスの日常生活』を参照。
- (9) 『ロンドン事典』182～183頁。
- (10) 『ジェントルマンと近代教育<学校教育>の誕生』を参照。
- (11) 『世界の教育史体系7 イギリス教育史Ⅰ』、『世界の教育史体系8 イギリス教育史Ⅱ』参照。
- (12) 『ジェントルマンと近代教育<学校教育>の誕生』を参照。
- (13) 『イングランド文化と宗教伝統—近代文化形成の原動力となったキリスト教』を参照。
- (14) 『イギリス国民教育制度研究』を参照。

## テキスト

Show, George Barnard, *Pygmalion*, New York: Dover, 1994.

アンソニー・アスキス監督、映画『ピグマリオン』(1938年)。

## 参考図書

- 天野亮一『なぜ英国は失敗したか?』ティ・ピー・エス・ブリタニカ、1987年。
- 安東伸介・小池滋・出口保夫・船戸英夫『イギリスの生活と文化辞典』研究社、1989年。
- 青山吉信・今井宏『概説イギリス史伝統理解を越えて』有斐閣、1989年。
- クリストファー=ヒバート、小池滋・植松靖夫訳『図説イギリス物語』東洋書林、1998年。
- クリスティン=ヒューズ、植松靖夫訳『十九世紀イギリスの日常生活』松柏社、1999年。
- W.J. リーダー、小林司・山田博久訳『英国生活物語』晶文社、1939年。
- 中島文雄『ディスターヴェーク 英米制度・習慣事典 第二版日本語版』中央公論新社、1988年。
- 中村勝己『イギリス歴史紀行』株式会社リプロポート、1993年。
- 長島伸一『世紀末までの大英帝国 近代イギリス社会生活史素描』財団法人法政大学出版局、1994年。
- 蛭川久康・櫻井信久・定松正・松村昌家・ポール=スノードン『ロンドン事典』大修館、2002年。
- 斎藤新治・沢井昭男・菅野芳彦・角替弘志『梅根悟監修 世界の教育史体系8 イギリス教育史Ⅱ』講談社、1981年。
- 菅野芳彦『イギリス国民教育制度研究』明治図書、1993年。
- 杉恵淳宏『誘惑するイギリス』大修館、1999年。
- ノーマン=サイクス、谷啓二訳『イングランド文化と宗教伝統—近代文化形成の原動力となったキリスト教』開文社、2000年。
- 谷川稔・北原敦・鈴木健夫・村岡健次『世界の歴史22巻 近代ヨーロッパの情熱と苦悩』秀文インターナショナル、1999年。
- 梅根悟・河合章・佐伯正一『梅根悟監修 世界の教育史体系7 イギリス教育史Ⅰ』講談社、1981年。

安川哲夫『ジェントルマンと近代教育〈学校教育〉の誕生』勁草書房、1995年。  
度会好一『ヴィクトリア朝の性と結婚：性をめぐる26の神話』中公新書、1997年。

(レポート指導教員 杉村使乃)